

# 吉屋信子の〈戦争〉

——「女の教室」論——

## 論文要旨

本論は、一九三九年に『東京日日・大阪毎日新聞』に発表された吉屋信子「女の教室」について考察したものである。本作では、日中戦争を背景として、七人の女性医師たちの人生が描かれている。本作における〈戦争〉とは、それまで男性たちに占有されていた仕事の場を、新たに女性たちが担っていくことを可能にするものである。さらに、女性の〈本能〉を恐わせる男性たちが〈戦死〉することによって、女性たちは高次の精神を獲得し、分断された女性同士の絆も回復する。〈東亜新秩序〉の〈聖戦〉のイデオロギーと合致した女性動員を提示しつつも、女性たちの新しい社会を望む彼女たちの欲望は、国策の範囲を超えて、男性のいない世界を夢見るという危険な結論に至っている。〈戦争〉に抑圧を解除する契機を見出してしまふことの困難について論じた。

キーワード【吉屋信子、女性医師、日中戦争、東亜新秩序、女性動員】

竹田志保

## (1) 吉屋の戦争協力への批判

日中戦争開戦時、吉屋信子が従軍記者として戦地に赴き、ルポルタージュを発表したことはよく知られている。一九三六（昭和十一）年の「良人の貞操」の成功以来、吉屋信子のネームバリューは絶大なものになっていた。小説執筆のみならず、講演や取材などの依頼も殺到し、多忙を極めて胆石を患った吉屋は、仕事を抑えることを決意し、雑誌は『主婦之友』と、新聞は『東京日日・大阪毎日新聞』と専属の契約を結ぶ。節筆を意図しての契約だったが、吉屋というスター作家を得た『主婦之友』は、小説連載の他にも取材記事などの仕事を積極的に担わせるようになった。そこに日中戦争が勃発し、『主婦之友』は同誌の目玉企画としてすぐさま吉屋を特派員として大陸へ派遣したのである。

八月二五日から九月三日までの北支滞在ののち発表された「戦禍

の北支現地に行く」(『主婦之友』一九三七(昭和一二)年一〇月号)、続いて九月二〇日から一〇月三日まで上海を取材したものが「戦火の上海決死行」(同、一一月号)として発表される。これらは、その後直ちに単行本(同年一月二八日、新潮社)として刊行されている。<sup>①</sup>また、一九三八年九月にはペン部隊が結成されて海軍班として漢口へ、この後も吉屋は満州、インドネシア、ベトナム、タイなどを行き来して『主婦之友』にルポルタージュを発表し続けている。<sup>②</sup>

女性読者からの絶大な支持を誇った吉屋が著したこれらの記事が、銃後の女性動員に果たした意味は小さくないだろう。それゆえに、これらはこれまで多くの批判を呼んできた。亀山利子、高崎隆二の論を筆頭に、渡邊澄子などの論の他、二〇〇二年のゆまに書房のアンソロジー「(戦時下)の女性文学」では、全集未収録であった『戦禍の北支上海に行く』、『月から来た男』の二冊が復刻されて、さらに注目されることとなった。<sup>③</sup>

吉屋の従軍ルポルタージュについては、総じて「あまりにも見事な時局追隨、単純明快な勸善懲惡主義」であり、「他国の領土への侵略なのではないかという疑問はひとかけらもない」と断ぜられる。それは、戦地の破壊の跡を眼前にしながらも、「抑制のない詠嘆と叫び」<sup>④</sup>によって思考停止し、日本の絶対的な正当化の外に出ることはないと言われ、さらに、その思考の限界は「まさに女学生的的思考としかいいようがないが、非現実的な少女小説ばかり書いて夢の

世界にのめりこんでいるとそういうことになるのかもしれない」という少女—女性の作家ゆえの甘さとして糾弾されてもいる。

こうした吉屋の戦争協力の問題は、長らく「少女小説」系統の研究では言及されることはなかったが、「少女小説」の可能性を復権する動きの裏側では、同時に「少女小説」的な想像力が批判されていたのである。しかし近年では、むしろ「少女小説」的なものと従軍ルポルタージュの関係こそが問われるようになっていく。久米依子は、両者に共通する二重化された表現手法を指摘して、「反転をくり返すようなこのねじれた文のなかに、表層では捉えきれない折り畳まれた意味を読みとるべき」と、その問題を厳しく認識しつつも、その語りえなかつたものを捉えようとしている。あるいは菅聡子は、「少女小説」から続く読者との感情的な親和性を重視し、銃後の女性を戦争に参与させる「物語の力」<sup>⑦</sup>を問題視している。今日、戦時下の仕事を切り離して、少女文化論の安全圏でだけ吉屋を評価することはできない。だが吉屋を典型的な戦争協力者として単純化することもまた不当であるだろう。吉屋信子という作家の問題と可能性の双方を見据えて、その重層性を抽出したこれらの論は、次なる吉屋評価の段階を切り開くものとして重要である。

確かに、吉屋の従軍ルポルタージュの言辭は、日本軍による破壊の跡にわずかな動揺を感じさせるところはあるものの、基本的には「端的にコロニアル」な「他者の征服の正当化」<sup>⑧</sup>であるに違いない。しかしこの時期に、求められてものを書き続けなければならなかつ

た作家個人にその責任を問うことは難しい。また、これだけを以て、どこまでが本音で、どこまでが建前かを分別しようとすることも不可能であるだろう。もちろん、平時の吉屋の男性批判の口吻と比べれば、ここでの軍人描写は明らかにコントロールされたものであるように思われる。軍人の発言として示された部分に改稿のあることから、それがリアルなドキュメントでないことは明らかでもある。だが、これが単に時局に応じて装われた格好だけのものであるとも考えにくい。ここには確かに「女性代表」として戦地の現実を捉え、またそれによって女性を啓蒙しようとする自負がある。おそらく吉屋は、ある程度は戦争を嫌悪し、しかしまた同時にある程度はその〈聖戦〉を信じていたのだろう。

そこで注目したいのは、従軍ルポルタージュと並行して書かれていた連載小説である。日中戦争開始以後も、基本的には女性の生活が中心に描かれることに変わりはない。設定は様々であっても、多くは友情や、恋愛・結婚が題材とされ、それまでの小説群と大きく雰囲気の違いのものではない。だからといって、小説がルポルタージュを相対化しうるものとしてあるという訳ではない。渡邊澄子はこの時期の連載小説の内容を概観した上でやはり「吉屋は疑問も後ろめたさもなく」、「文字通り最初から聖戦と信じて是認したその戦争に彼女を尊敬し憧れる女性大衆を誘導・先導する役割を果たしてきた」のだという。確かに、ルポルタージュほど直接的でないとはいえ、小説にもまた素朴な時局追隨、戦争賛美があることは否め

ない。

だが本論では、その戦争が何故肯定されるのかということ、時代の圧力にだけ還元するのではなく、小説のなかの論理で捉えてみたいのである。一見それまでの長篇小説と大きな変化のないようにも思われるモチーフ―女性の職業の問題、恋愛・結婚の問題に、〈戦争〉の軸が加えられることによって、ある変化が生じているのではないだろうか。そして、そこにこそ吉屋信子にとっての〈戦争〉の、重大な問題があるのではないだろうか。

## (2) 「女の教室」の成立について

本論では、一九三九〔昭和一四〕年から一月一日から八月二日まで『東京日日・大阪毎日新聞』に連載された「女の教室」について考察していく。これは繰り返し批判されてきた一九三七〔昭和一二〕年の北支・上海視察、翌年のペン部隊従軍を経て発表された小説であり、小説内で戦争が大きく扱われるようになる最初の作という点で重要な位置にある。また七人のバラエティ豊かな女性を主人公に揃えて、それまでの新聞連載小説のなかでも最長のものとなった本作は、いわばこれまでの作品の集大成のようなところがある。

「女の教室」は「学校の巻」、「人生の巻」、「戦争の巻」の三部で構成され、一九三六〔昭和一一〕年春から一九三七〔昭和一二〕年の南京陥落までの時代を背景に、女子医科専門学校の同窓生である

七人の女性医師たちが、それぞれに職業や恋愛などの悩みを乗り越えて成長していく姿が描かれる。

この連載を依頼したのは、当時学芸部長であった久米正雄である。この頃、朝日では同じく女性従軍作家であった林芙美子の「波濤」が連載されており、東日大毎はその対抗馬として吉屋を擁立したのだった。単行本あとがきによれば、依頼は一二月二日であったというが、早くも本連載についての予告が一七日に発表されている。そこでは「いはゆる戦争小説ではありませんが、聖戦の鼓動脈うつ新戦場を一つの背景とし、女主人公はこの新東亜の大舞台に『科学者の道』を歩む一人の若き女医、事変の激動の中に科学者の知性と女性の情操が如何に運命を彩るか、いかに明けゆくアジアの黎明を身をもつて認識してゆくかといふ新しき『日本女性の道』が描かれていきます<sup>10)</sup>」とうたわれている。また、吉屋も次のように抱負を述べている。

この度の作品は、私の海軍従軍の後に、始めて世に問ふ最初の作でございます。私は従軍中も、大砲の音に呼吸も止り、毎日の機雷爆破の水煙に眼もくらみ、望遠鏡に浮かぶ敵兵の姿に身をすくませ、支那難民の女の姿に胸痛みつ（われら女性は、何をなすべきか）を考へ、ひいては（敵国支那の女性にも、またわれら何を望むべきか）をも、考へ至りました。／その戦場の砲煙の間に、女の心と眼を通じて、感じ得たる祖国と、憐れな敗残敵国への認識と観念とを底に秘めていさ、か心に期する

ところありて、敢然とこの作品に立ち向ひます。／願はくば、朝げの後のひと、きをおん眼を給はらば、筆者の喜びこれに過ぎませぬ<sup>11)</sup>。

また、連載開始前の一二月二三日には、予告への反響を受けて再び記事（『新小説』『女の教室』元且紙上から）が出ている。そこでは、小説のモデルとされる二人の女性が紹介されている。一人はかつて吉屋家の仲働きとして働いていた人物であり、小学校から専検を経て女子医専に挑戦したというエピソードは、登場人物の一人・蠟山操の原型となったものだろう。また、もう一人のモデルとされるのは、「支那のインテリ女性」である<sup>12)</sup>。以前日本に留学していた頃に宣教師を通じて吉屋に知遇を得たという彼女は、その後上海で教職に就いており、ペン部隊で上海にあった吉屋と再会している。吉屋はそこで彼女について、「久しぶりにあへた嬉しさ、しかも心の底からうちあげ手を握れない悲しさ。その複雑な気持をどうにかして現はさうと思つてゐます」と語る。彼女への思いは、中国からの留学生として登場する陳鳳英に投影されているだろう。これらの予告では、あらかじめ「聖戦」や「新東亜」などの同時代の政治的な枠組みがはっきりと打ち出されている。同時に、「敵国支那の女性性」についての微妙な表現にも注目される。「日本女性の道」とともに、「憐れな敗残敵国」の女性たちをいかに表象するのも問題となるだろう。

本文の分析に入る前に、本作の異同について確認しなければなら

ない。「女の教室」は新聞紙上での連載終了後、中央公論社から一九三九（昭和一四）年に単行本が刊行されている。その後終戦を経て、一九四七（昭和二二）年に「長篇名作文庫」の第五巻として矢貴書店より再刊されている。しかし、この矢貴書店版では全面的な本文改稿と合わせて、後半の「戦争の巻」が削除されている。これはおそらくGHQのプレスコードに配慮したものだと言測され、中国批判や軍国主義宣伝にあたる部分が削除改稿されている。

これが、のちに一九五九（昭和三四）年に東方社から再刊の際に、「戦争の巻」を戻したかたちで収録される。現在定本となっている朝日新聞社版は、この東方社版を踏襲しているが、しかしこのテキストには注意が必要である。

藤田篤子は東方社＝朝日新聞社版のテキストが、戦後に大幅に改稿された矢貴書房版の「学校の巻」「人生の巻」に、戦前の初出版「戦争の巻」が接ぎ木されたものであることを指摘している。<sup>13</sup>朝日新聞社版の全集は、この他にも書誌上の問題を多く抱えた不完全なものであるが、藤田は、説明を欠いたまま二つの異なる歴史性を帯びたテキストが一つのものとして流布している現状に疑問を呈している。よって、本論では、初出の新聞連載時のテキストを使用して、分析を行っていく。

### （3）中国・満州表象

まずは前節で見てきた従軍ルポルタージュと強く関わる日中戦争に関わる記述から確認していく。その勃発は、連載の中頃、ちょうど彼女たちが医専を卒業して、それぞれ新たな生活に入った頃に訪れる。轟有為子と同居する仁村藤穂、また轟家のばあやの清の間で、通州事件が話題になっている。この部分は、初出からの改稿の多いところであるので、やや長くなるが全体を引用する。

藤穂が、桔梗を持つて入ると、その茶の間では、朝餉の卓を控へて、有為子が新聞をひろげて、眼鏡の奥の眉を擧めて、／「あ、たまらないわ、通州の残虐事件——なんてひどい残忍性が支那人にあるんでせう！」／新聞のその報道記事から、眼を覆ひたくなるほどの、烈しい衝撃を受けてゐた。／「なんで、又その鬼みたくないな奴等を、こちらでまる／＼信用したもんでございませうかねえ」／清も口惜しがる。／「——なんとかして、こんな惨事を、未然にふせげなかつたかしら？」／有為子が嘆じる。／「ほんとにねえ、で、これから支那と何うなるんでせう？」／と藤穂も、花を片手に、新聞をのぞき込む。／「もう、かうなりや、不拡大もへちまもございませうまい、こんな支那の兵隊は一人残らずやつつけて仇をとつて戴かないことにや、承知出来ませんよ」／清が力む。／「そんな無茶、言つたつて駄

目だけど——つまり、この悲惨な事件を通じて、日本も反省しなければならぬ。／ナシヨナリズムが、宿命的なものだといふこと、治安維持の為に置かれた保安隊がいざとなると、日本人にこんなひどい事をするという事実は、これから、亜細亜の盟主となる大理想を持つ日本が支那とのほんたうの融合平和をうはつただけでなく、根底から築かなければ駄目だつてことね——その為には、戦争も仕方がないかも知れない。／いつそ、いま、での、支那との何もかもを、清算して、新しい支那をつくつてしまふ為にな——私さう思ふわ——どう？ 藤穂さん」／この七月の初め北支の蘆溝橋で日本駐屯部隊の夜間演習中に、支那軍隊の不法射撃を受けてから生じた、北支事変は、この頃ますます拡大して、はては、その月末には通州で保安隊反乱の惨事が勃発したのだつた。／花鋏を鳴らして、壺に桔梗を挿しかけながら藤穂が、／「どうかして、戦争せずに、うまく支那とやつてゆける外交官がゐないのねえ」／「ほんたうにねえ」(一九三九・五・一〇)

ここで、中国の卑劣に怒り、好戦的な態度を示しているのは清である。また有為子も戦争を「仕方がない」と是認する。ただし、ここで強調されているのは、感情的に中国への反発を高めて戦意を昂揚することではなく、「亜細亜の盟主となる大理想を持つ日本が支那とのほんたうの融合平和をうはつただけでなく、根底から築かなければ駄目だつてこと」である。「新しい支那をつくつてしまふ」

ためには、「日本も反省しなければならない」のである。

中国や満州の描写においては、その後進性や迷妄、反日感情が指摘される。しかし同時にそうした認識をもたらしたのは過去の日本の責任でもある。蒙を啓き、新しい中国、新しい満州——新しいアジア世界を建設するために、指導者たる日本もまた新しくなる必要がある。本作でくり返されるのは、この構図である。

たとえば、羽生与志が卒業後に職を求めて向かった満州では、彼女が唯一の医師である。同地で働く牧師の鮎川哲の妻は朝鮮人の桂玉である。「迷信的に医師を嫌ふ」<sup>14</sup>、「環境上からも無教養で無知で——その上、少し魯鈍な生れ付き」<sup>15</sup>でもある彼女によって、朝鮮女性の後進性が代表されており、これ自体は差別的な視線というほかない。しかし一方でかつて当地には「半島で、濡れ手で粟のつかみどりの一儲を志ざして渡つた無考へな日本人——所謂内地の喰ひ詰め者」<sup>16</sup>、「朝鮮の人に対して、まるで横暴な征服者のやうな考え方」の者、「日本の男のなかには真面目に結婚の意志もなく、半島の女性をたぶらかして平然としている」者があり、彼女が十年前にその被害に遭つた女性であることが明かされる。そして鮎川は「日本の男の罪の償ひを自分で負ふつもりで」彼女と結婚したのだという。彼はデュガルド・クリステイを引用して、次のように言う。

それは、戦後の平和と共に、日本国民中の最も低級な、最も望ましくない部分の群衆がこの土地へ続々と、入つて来て、日本は世界の一等国だ、ロシアを負かした、いはんや支那人なん

か征服して無視すべしといふ乱暴な態度の行動で、不正や搾取を平然と行なひ、折角日本軍によつて生じた彼ら満州人の日本への信頼と救ひ主として絶る心のすべてを、もの、みごとに幻滅と失望で破り、日本人に対する不幸なる嫌悪の感情を深く植ゑ付けた——（一九三九・五・二三）

満州での日本人の暴虐を批判するこの箇所は、日中戦争下の侵略行為への批判ともなりかねないところがあるが、繰り返し「日本軍隊の正義と仁義がいかに奉天の民衆を救ひ安心させて、信頼されたか」を強調して、あくまで日本軍の正当性は守っている。その上で、彼は「いまこそ過去のおろかな日本人の過失の償ひに、こゝで慟く使命を帯びてゐる」<sup>(18)</sup>と語り、だからこそ与志の働きに期待する。満州の人々が、迷信や無知を払い、医療や教育を受けて、進歩すること。そして日本人の慈愛を知つて、「あの注射を受けたこともたち」が、優しい日本の女医から施された医療によつて、それが貴い絆になつて、日本へ心をつなぎつゝ、成長してゆく未来<sup>(19)</sup>を育てていく必要があるというのである。

七人のグルッペの内の一人、中国人の陳鳳英はこうした日本からの理想を内面化した理想的中国人として造形されている。彼女は入学式では「日本の学校のみなさまに、愛される生徒であるやうに、祈つて居ります」<sup>(20)</sup>と挨拶し、その日記に「把新酒装入旧的酒革者、これは我中国的現状、真是可悲。把新酒装入新的酒革者、這是造成日本明治維新後的隆盛之因、真是可羨的呢」<sup>(21)</sup>と記す。中国の医師の

少なさを恥じながら、しかし「私の国もだんくよくなりませう。私ども、若い学問をした者が、よくしてゆかなければなりません！」<sup>(22)</sup>と語る彼女は、遅れた古い中国を恨み、日本に習つて新しい中国の生まれることを望む中国人なのである。

卒業後に始まった日中戦争によつて、同じグルッペであつた陳鳳英との交流は不可能になる。「いくさつて、せつないわねえ……」<sup>(23)</sup>と藤穂は嘆く。そして最も親しかつた与志は折に触れて鳳英を思い出す。南京陥落直前、与志は中国の雑誌のなかに鳳英を見出し、胸の塞がる思いをする。彼女たちにとつて、鳳英は敵なのではない。「東亜の新しき平和は、いつ新しい支那に入れられるのであらう——？」という思いを彼女たちは共有し、その苦しみを抱えながらも「自国の敗軍の傷兵を守」<sup>(24)</sup>らなければならない立場にある鳳英の悲劇を思うのである。

中国をただ憎むべき敵として描かないことに、従軍ルポルタージュとの差異はあるかもしれないが、こうした構図は、また端的に当時の「東亜新秩序」の思想に合致するものだろう。一九三八年に近衛内閣が発表した「東亜新秩序」声明は、それまでの強硬路線を修正して、日中提携を打ちだすものであつた。そこでは西洋帝国主義からのアジア地域の独立のために日本が指導的立場を担つて「東亜新秩序」を建設することが主張される。これはあくまで日本を盟主とする東アジア統合の構想であるという点で、後の「大東亜共栄圏」構想に繋がるものであるが、そのなかで帝国主義的政策を転換

して、日中の和解と連帯が試みられていたことに注目される<sup>(25)</sup>。ここでは、日中双方が社会改革を通じて古い体質を克服することで、新たな東アジア共同体を形成することが目指される。本作の鳳英は、日中戦争勃発後は、中国と日本のあいだで分裂的な立場を強いられるが、彼女たちは「新秩序」の構想を共有することで、鳳英と再び一体化することを祈るのである。この小説が、一九三九年の時点において、一九三七年の南京陥落までを描きだすことは、実際には泥沼化していた日中戦争について、日中提携を掲げる声明に沿うように改めてその正当性を定義し直すことであり、さらにそこに積極的な意義を与えようとするでもあったといえるだろう。

また、この声明の前後から、近衛内閣のブレーンでもあった昭和研究会などを中心に「戦時変革」の議論が活発化していることも重要であるだろう。これは「東亜共同体」のような日本を中心としたアジア共同体の建設を提唱するとともに、日本国内の思想や社会・経済構造などに関する「変革」を企図するものであり、一方では帝国主義政策の一環でありながら、同時にその自己批判を内包するものでもあった。ただし、これらの議論は前述のように一九四〇年代には「大東亜共栄圏」構想に拡大されて、批判的契機を失っていくことになるのであるが、米谷匡史は、このとき三木清ら革新左派知識人が積極的に時局に介入しつつヘゲモニー抗争を行っていたことと、そこで東アジアの連帯を導き出す「可能性」が模索されていたことを重要視している<sup>(26)</sup>。そしてこのとき目指された「戦時変革」と

いう構図は、この小説にも見出すことができるのではないか。もちろん、小説にこれらの「戦時変革」論が直接的に参照されているという訳ではない。昭和研究会などが検討していた「変革」とは、具体的には、既成政党や財閥を打破するための新党運動や計画経済の導入の検討などとして展開されたのであり、本作の内容とそのまま対応するのではない。しかし、このときさまざまな論者が投機的に試みていた、日本への自己批判による「戦時変革」に「希望」<sup>(27)</sup>を見出すという構想は、この小説にも共有されているのではないか。「女の教室」は、卒業後のグルッペたちのそれぞれの進路のなかに、日本の「変革」をさまざまに描出している。それは一方では国策に連動しつつも、同時に旧来の社会通念を乗り越えようとするものともなっている。そしてこれは主に戦時下における女性の地位向上に関わるものとして展開されるのだが、この小説における「変革」は、単に地位向上という以上の過激な「希望」を描いていくことになるのである。

#### (4) 新しい日本

満州の描写においても、医療の浸透が重要視されていたが、国内においてもそれは重要な課題であった。このことは、蠟山操が向かった農村の描写によく表されている。操は母の急病から、研究の道を諦めて「東北の無医村診療所」<sup>(28)</sup>に就職することを選ぶ。それ



は「いま、での村医が、軍医で応召したので」<sup>(29)</sup>それを補うためであると説明される。実際、当時は男性の徴用によって、女性医師の需要が急上昇した時代でもあった。

研究への希望を引きずりながら、はじめての診療の現場で操が直面したのは、農村の貧しさと、根深い迷信である。すでに絶命した嬰兒を背負って病院を訪れた老婆に早期治療の重要性を伝え、狐憑きを祓うための折檻に衰弱した女兒に適切な治療を施しながら、操は次第に「この村に、今日のやうな古い一つの迷信を追い払つただけでも、医師として居ることは世の為に役に立つのだ」<sup>(30)</sup>と感じるようになる。

こうした農村医療の拡充は、この当時の医療界の大きな課題であった。山本起世子<sup>(31)</sup>に拠れば、一九三〇年代後半から、医師の都市集中が問題視され、自由開業制度やその営利的性格が、医療の不平等を生じさせていることが非難されるようになったという。そのような状況を受けて、医薬制度調査会が「医療制度改善方策」を提出するのは一九四〇〔昭和一五〕年のことである。ここでは現行医療制度の根本的改革として、医師の勤務地の指定や、無医地域に対するの公営医療機関の設置が訴えられた。しかし、それは一方では「戦時期体制における人的資源の確保という国家目標の下で、全国民が医療化の対象とされた」<sup>(32)</sup>ということにほかならない。日本全体が健康な国民によって構成されること、これはまた一方では病める者の排除・隔離の動きと連動する。この問題に関わる本作でのハンセン

病の扱いは見逃すことができない。

伊吹万千子は、もともと大病院の院長の令嬢として育ち、出産の見学では気絶し、癩院の見学においても「私は駄目。絶対に——とでも——弱虫なんですもの」<sup>(33)</sup>と弱音を吐くような女性であった。しかし、結婚を約束していた宇都木恵之助が、伊吹家の調査によって「あの分家すなわち恵之助君の父親の方は、確かにレプラで天死した」<sup>(34)</sup>ということが明らかになって、彼女の人生は激変する。自身に症状はないにもかかわらず、それを知った恵之助は服毒自殺する。以来、万千子は「もう万千子は死んだものと思つて……万千子の生涯は恵之助さんに捧げさせて下さい」<sup>(35)</sup>と、救癩事業に殉ずることになる。

菅聡<sup>(36)</sup>が指摘するように、前年のベストセラーである小川正子「小島の春」<sup>(37)</sup>をそのまま持ちこんだかのような万千子のエピソードでは、やはり「小島の春」と同じく、「隔離療法」の重要性が説かれている。本作におけるハンセン病は、「遺伝」ではなく「伝染」病であることが強調され、またそうであればこそ、過去の迷信によって対処を誤つたがために「日本にどれだけ、あの恐るべき病菌が播かれて新しい不幸な罹病者をつくつたか知れない」<sup>(38)</sup>ということが、繰り返し批判されている。

「(前略) 何より先に、まづこの病気だけは、絶対に隔離療法が必要でせう、その為にこの島の療養所はな無くてはならぬ処なの。／日本では天刑病といふ迷信から、家を追はれてさまよつて流浪のうちに、黴菌を撒き散らして、こんなに国中にふや

してしまつたわけですわね——現在、日本の癩患者の数は、世界第三位よ！相当な癩病国よ、国の恥ね、そして国家の責任ね。(中略)／欧州諸国文明国は、いまこの病気は、ほとんど根絶しているのに——日本は本土、台湾、朝鮮を入れると、政府の統計以上に、実際は約四万の罹病者よ——おそろしいのね——棄ててはおけないわ」(一九三九・七・二二)

「どうしても、国民協力して、この療養所をたくさん建設して、十ヶ年後には、療養所以外には一人の癩者なしといふ、ほんとの文化の国にしたいのが、私たちの一生の望みですの。／国を愛すことは、戦争の時ばかりでなく、平和の時も、国の文化を押し進める国民総動員の気持がなくてはね——」(一九三九・七・二三)

ハンセン病への「隔離療法」は、今日では批判されているところのものであるが、本作では当時の新しい科学の言説として、古い迷信にこれが対置されている。万千子の台詞として長々とこれが説明されるのは、当然読者にもその知識を広める目的があったからだろう。物語の内外で、正しい知識を持って、古い日本を克服していくことが目指されているのである。

また、操の農村医療も、万千子の救癩事業も、いずれも国家事業としての矜持が示されている点で共通する。操は、有為子の死後、彼女の遺言から、研究の道に戻ることになるが、これもまた「科学の研究もやはり国家の為に大きな貢献となる」<sup>(39)</sup>という意味で、新し

い日本の進化を担う事業ととらえることができるだろう。

万千子の父は、救癩事業に身を投じたいという娘に、「肉親の情として、個人的には忍びがたいものがあるが」、「かうして一族医業に携さはつてゐる家庭として——この万千子の国家保険上重大な癩院への奉仕を、さまたげる事はいさ、か恥じ入る」<sup>(40)</sup>と言つて彼女を送り出す。そして操と万千子の新たな出発の際には、いずれも出征兵が登場する。見送られる彼らを横に見ながら「個人の運命より、もつと大きな国家の運命を護る為に！」、「私も単にパンの為のみでなく、無医村で、国家の民衆保健の為に尽さねばならない！」<sup>(41)</sup>と決意する彼女たちの出発は、明らかに女版の出征として描かれている。「戦争は弾丸を撃ち合ふそればかりでなく、人生には眼に見えない戦争が、幾つもあると思ふの、そして人間はいつもそれに従軍して行くやうなものね」<sup>(42)</sup>と万千子は語る。こうした困難かつ価値ある仕事への参入こそが、女にとつての〈戦争〉なのである。

これは満州に渡つた与志にとつても同様である。彼女は満州で暮らすことの心細さを感じるが、「医師的成功は、彼女のついでさつきまでの激しい孤独感や寂寥を忘れさせて、生き甲斐ある喜びを脈打たせ」<sup>(43)</sup>るようになる。そして満州に医療をもたらす彼女について、鮎川は「十年離れてゐる間に、自分の祖国の文化が、いかに高まつたかを知る、一つの生きた証拠を確に此の眼で見たといふ気持」<sup>(44)</sup>になる。厳しい環境に身を投じ、尊い仕事に従事する女性たちは、憧憬のままざしでもとらえられる。それまで恋愛に心を惑わされてい

た藤穂は万千子に「なにか、このひとが——自分などより、はるかに高い処に位置する人に思へて——へりくだらずには、ゐられなかつた」と、自身もそれに啓発されるようになる。こうして女性たちは、新しい日本を担う存在として期待されていくのである。

日本における女性医師は、大正末には全国で千人程度だったものが、一九四〇〔昭和一五〕年には三千人ほどに増加している。前掲の山本起世子は、戦時下において、女性医師の社会的評価が高まったことを指摘している。<sup>(46)</sup>一九三九〔昭和一四〕年の『医事公論』記事では、「目覚ましい女医の進出振りは日本医学史始つて以来の新現象」として、その一因を「事変による男医不足の間隙を衝いて一斉に進出した」ことと説明している。<sup>(47)</sup>こうした状況の中で、それまで男性医師に比べて差別的な扱いを受けることも多かった女性医師たちは、特に予防医学や家庭衛生においてその重要性を認められ、賞賛を受ける存在となった。一方この頃、男性医師をめぐる言説は、開業医制度の危機や志望者の激減などの苦悩に満ちていたという。これまで女性医師たちは、根強く続く「女医否定論」に対して、あくまで男性領域の侵犯性は否定する言説戦略をとることで自らの立場を守ろうとしていたが、ここに至って男性医師を凌駕するような勢いを見せていた。一九三九〔昭和一四〕年に、日本女医会理事であり女子医専校長であった吉岡弥生らが「国民精神総動員中央聯盟」理事に任命されたことは、女性医師の地位の向上と、また、彼女たちが国家的使命を担う存在であることが示された象徴的な出来

事であるだろう。これに際して、ある女医は『日本女医会雑誌』上で「急に楽しい世の中が眼の前に開けてくるようなよろこびを味はわされた。婦人が国の高位にある男子に伍して特定の地位につくといふやうなことは全くすばらしい事実なのである」という感激をあらわしている。〈戦争〉という契機こそが、女性医師たちの地位向上をもたらしたのであり、「女の教室」の彼女たちもまた、まさにそうした機運のなかにあつたといえるだろう。

### (5) 結婚問題

与志や操、万千子の仕事への邁進は、彼女たちを社会的に高次の存在として押し上げる。〈戦争〉が女性にとつては社会進出のチャンスであつたことは、しばしば指摘されることである。しかし、彼女たちはある意味で、〈名誉男性〉なのであり、その仕事があるがために一般的に女性に求められる役割——〈良妻賢母〉たることを免除された特殊な存在であつたともいえる。このことは、もう一方で女性に要請される恋愛や結婚を、この小説がどう描いているのかを対照してみると、単に女性の社会進出という以上に、〈異性愛〉制度や、〈妻〉・〈母〉役割の回避の欲望として見えてくるのではないだろうか。

まず、七人のグルッペのなかで結婚したのは、陳鳳英と細谷和子の二人である。和子には学生の頃から士郎という許嫁があり、卒

業後すぐに結婚している。ここで専ら悩みの種となるのは、仕事と結婚を両立しうるか、という問題である。この問題も、前述の山本によれば<sup>(49)</sup>、実際に当時の女性医師たちの抱える大きな困難であったという。士郎は、和子の理解ある伴侶ではあるが、「奥さんが朝から晩まで家を明けて、病院で働らくのは、良人として降参だ<sup>(50)</sup>」と言う。和子はこれを「男の我儘な、ネグライズム」と不満に思い、鳳英の夫が結婚後の就業にも賛成であるという話を聞いて「わが未来の良人の士郎が、結婚後女医の職を許さぬのは、これ。いさ、か日本男性の度量、ならびに社会文化への考え方の足りぬやうで——支那のひとに、はづかしい<sup>(52)</sup>」とも感じている。

こうした問題は今もお続くものであるが、本作では基本的に妻の仕事が重んじられていることが特徴であろう。もちろん〈女医〉という職業故のもの、という留保は必要であるとしても、女性にとっての仕事は、必ずしも結婚までの一時的なものとはばかりは考えられていない。むしろ、女性の職業を認めないことは、中国よりもさらに遅れた考え方であり、改善すべき日本の後進性ともされているのである。

のちに和子は、士郎が彼女の就業を嫌がるのは、彼が少年時代に働く母を持っていたがために寂しさを感じていたことが理由だと知って、「貴方のお母さまに代つて<sup>(53)</sup>」家庭に入ることを納得する。

その後、和子は士郎の計らいで一時的に就業もするが、妊娠が判明して、最終的に彼女は家庭の妻となっている。女性にとっての仕事

の価値を重視しつつ、その仕事と代替しうるものは、〈母〉であると位置づけることで、〈母〉の意味を高めているとは言えるだろう。

しかし、この小説がやや不穏な印象を与えるのは、これらの夫婦のどちらにも、夫の〈戦死〉（もしくは〈戦死〉の可能性）が描かれることである。もちろん、実際に日中戦争開始以来、夫の〈戦死〉は現実的なものとなり、まさにこれから拡大していく問題でもあった。吉屋もこの連載と並行して『主婦之友』では「未亡人<sup>(54)</sup>」のタイトルで連載を持っており、この展開もまた未亡人問題への関心として捉えることはできる。だが、さらにもう一人の出征者である藤穂の義兄・大野栄吉の〈戦死〉もここに加えてみたとき、この小説における男の〈戦死〉には特殊な意味付けがあるように思われるのである。

そこで注目したいのは、仁村藤穂のエピソードである。彼女は、七人のグルッペのうちでも最も登場頻度が高く、物語の中心的存在であるが、彼女をめぐるのは複雑な展開が用意されている。

藤穂は産婦人科院長であった父の妾宅で生まれた娘である。その後、父が死去し、母のおふじは函館湯川の温泉旅館主人の大野浦五郎と再婚しているが、藤穂は大野の籍には入ることなく、母方の家に戸籍を残したままであり、また母たちとも離れて東京の寄宿舎で暮らしていた。

藤穂に最初に生じたトラブルは、学生時代に、おふじから栄吉との結婚を打診されたことである。栄吉は、浦五郎の先妻の息子であ

る。おふじは、栄吉と結婚するかたちで、藤穂を大野の籍に入れることを考えたのである。栄吉は藤穂に思いを寄せており、藤穂もまた必ずしも栄吉に好意を持たない訳ではなかったが、女には結婚が必要と説くおふじに反発する。結局、藤穂の抵抗によってこの結婚は実現しなかったが、藤穂にはこの後も繰り返し結婚の問題が浮上する。藤穂については、医師としての自立の道と同時に、恋愛―結婚を期待される女性という二つの方向性が示されているのである。

彼女が医師を目指したのは、医師であった実父への憧れも背景にあるが、母の再婚相手である大野家から独立するためである。また、卒業後に京都で医者として働くようになった彼女が、女性差別的な意識を持つ男性の考えを変えるエピソードも描かれており、彼女の仕事、ただ医療行為としてだけあるのではなく、人々の旧弊な意識を変革するものとしての意義を持つていることが示されている。しかし、彼女は、親友の有為子のように仕事だけに邁進しようとする人物ではない。彼女には家庭的なところがあり、家事にも積極的である。しかも彼女は「家庭的であると同時にまた消費性をも兼ねて」<sup>(55)</sup>いる「おしゃれ本能」<sup>(56)</sup>の強い女性であり、学生時代も、寄宿舎でも禁止されている化粧品を使用していた。あるいは、気に入った家具を揃えるためには自分の収入を度外視した買い物をする。ここには医者としての意識や自活への意識は薄い。周囲から見ても、彼女は「お綺麗で、とても女医さんには、見え」ないような人物であり、「お若くつておきれいで、そして江戸ツ子肌で、さつぱりして

親切で、女医さんだつてのにお台所は手伝つて下さる、お針はなさる、いまだき珍しうござんすよ」という、職業婦人らしからぬ性質を盛り込まれているのである。

彼女自身が、自分の進路をどう考えているのかは、よくわからないところがある。彼女は結婚についてはむしろ「一生にたった一度、女が異性に感じ得る、大事な刺戟と感激とは、たゞ（結婚）の機会にのみ、許される喜びのたと、思つてゐる」<sup>(58)</sup>という理想を持っており、栄吉との結婚については「なんの感激も喜びも驚きもなく、たゞ、いま、で浸つてゐた、ぬるま湯のなかに、またも、じつとして居続けるやうな生ぬるい結婚生活——と思ふと、ただいちづに、つまなくつて、情なくて、たまらなかつた」<sup>(59)</sup>と想像する。

その一方で、卒業後に有為子たちと共同生活を始めたときには、「結婚なんて、けつしてしないわ、貴女と隣ちやんと、そしてお清さんと、ああして暮すのが、一番楽しいんですもの」<sup>(60)</sup>、「だつて、私にも結婚しないだつて、ちやんと自活できるんですもの——だから、私じぶんの好きなこのまゝの生活一生つゞけるつもりよ!」<sup>(61)</sup>と語る。従姉妹の幾代は、藤穂を「女学生気質」<sup>(62)</sup>と評したが、藤穂の主張はまさにそのモラトリアムの色合いが強い。藤穂は、結婚を夢見る気持ちはありながらも、それはあくまで理想のレベルでしか語られず、むしろ彼女にその準備ができていないことを示している。彼女は新しい段階に進むことには積極的ではなく、むしろ学生の頃の気分を維持したまま、有為子たちと生活することに留まろうとす

るようである。このとき、医師の仕事は結婚を留保させるものとして機能しているといえよう。

しかし、藤穂との生活は、有為子にとってはやや違う意味を持っている。有為子は、学内でも一二を争う秀才であり、元勸銀の総裁の父を持つ令嬢であったが、父母に先立たれてその遺産で暮らしている。卒業後は弟とともに京都に移り、研究の道に進んでいる。有為子と藤穂は学生時代から特に仲が良く、藤穂の結婚問題に際しても有為子が援助してこれを回避したのだった。ゆえに、有為子は卒業後の京都移住に、藤穂を誘うのであるが、実は有為子は、藤穂に特別な愛情を抱いているのである。有為子と藤穂の生活は「勉強家の旦那様を持った奥さんみたい」な擬似的な結婚生活でもある。有為子はそれを喜びながらも、「いつまで——かうして、私たち仲よく一緒に生活出来るかしら?」、「貴女にも、今に好きな異性が出来ればやはり結婚したくなる——あ、その時は、私すこし参るな——きつとさびしがるわ——だけど仕がない、それが貴女の幸福の為なら」<sup>(64)</sup>という不安を抱えているのである。

## (6) 女性たちの目覚め

そして有為子の不安は、身近なところから現実となる。美しく魅力的な藤穂は、多くの人を惹きつけるが、先の栄吉だけでなく、有為子の盲目の弟・麟也もまた、藤穂に秘かに恋し、ばあやお清が

藤穂と麟也の結婚を願うようになる。またその一方では、留学していた有為子の兄・龍一が帰国して、既に妻のある身でありながら、藤穂を誘惑し始めるのである。

龍一はドイツ人である妻・エルマを伴って帰国したが、そこで「日本的に繊細で、もの優しい藤穂」<sup>(65)</sup>、「彼の過去に接した、女たちと類を異にして、知性備はつて、感情豊に、教養あり独立性ある美しい日本の処女」<sup>(66)</sup>に惹かれていく。龍一の巧みな誘惑を、藤穂は知的にはね除け続けていたが、一時を境に「私、もう、自分が怖くつて——駄目になりさうなの」と陥落する。<sup>(67)</sup>

——学窓時代から、内部に抑へられていた(青春)の息吹の成熟した(女)の魂が、いま、異性の内に自己を見出さんとする——自然の誘導の恐ろしさに、藤穂は、おの、いて眼をつぶつた。(中略)／藤穂はその囚はれの《恋》ゆゑに、死にもの狂ひで、理智の虚勢と煙幕を龍一に張つてゐたのであつたか！  
(一九三九・六・二八)

ここに至って、それまでの藤穂の態度は、龍一に惹かれていたがための虚勢であり、まさにこれこそが彼女の夢見ていた「一生にたった一度、女が異性に感じる大事な刺戟と感激」<sup>(68)</sup>であるかのように興味づけられるのである。

有為子にとって、兄と藤穂の関係は驚くべきものだった。彼女はこれを「お妾の生活もあつた母の血を受けて育つた、このひとが、兄のやうな有閑階級のデレタントの瀟洒な美青年に魅かれたの

も、持つて生まれた(女)の約束のやうな気がした<sup>(69)</sup>と理解しようとしており、藤穂への信頼と愛情に亀裂が生じている。有為子は、道義にもとるこの関係を認めることはできず、藤穂に友情の終わりを告げる。ただし有為子と藤穂の別れは、兄だけでなく、弟からも藤穂を遠ざけるためのものでもあり、「異性の強さ」で藤穂を奪おうとする力から愛する「同性の友」を守りたいという願望でもある。彼女は、そのために自分の愛情をも断念しようとするのである。

藤穂自身も、自分の龍一への気持ちに葛藤を覚える。妻ある男性を愛すること、さらにはそれが自分の親友の兄であることは彼女を苦しめる。一度、彼女にその清算を決意させたのは、自身が診療した女兒の死である。「ついさつき小さい生命の終りを見守った神聖な医師の意識」と「あの時の清浄だった人の子の母にも代るこゝろ」が、「刹那の、恋に囚はれの女の心」を凌駕しかける。また、その決意を決定的にするのは、出征した義兄・栄吉の〈戦死〉の報である。藤穂は意を決して龍一に別れの手紙を送る。

万里の波濤を超えて、日本の男を信頼して、いらつしたエルマ様のお気持ちを裏切ることを、貴方の為に、かつ日本の為に、お考えになつて下さい。／エルマ様が、貴方に失望して盟邦独逸へ、もしお帰りになるとしたら、あの方は、故国に於て、日本を、日本人を、なんと批判なさるか——その責任は誰が負ふべきでせう。／私どもは、今こそ、単なる私的生活の行為に於ても、常に国を思はねばなりません。／はるばる渡つていらつ

した異国の女性を、この国の女性が、不幸にしてすみませうか?／いま、私は《恋愛》以上の、高い精神を知りました。それは戦死した兄の霊が、無言のうちに、妹を導き教へたのでございませう。(一九三九・七・七)

藤穂は、龍一との恋愛を「一番低い卑しいもの」であつたと自己批判する。藤穂は「その身内の(女)に打ち克ち、叩き伏せ、自分を立て直さうと」する。そこで彼女が〈私〉的な恋愛感情に対して打ち出すのは、仕事であり、「人の母にも代わるこゝろ」であり、「盟邦独逸」の女性への配慮である。藤穂は、あらゆる〈公〉性を動員して「《恋愛》以上の高い精神」を示すのである。

だが、何故栄吉の〈戦死〉が藤穂の覚醒につながるのだろうか。このことには、和子の夫・士郎の手紙を参照することができる。出征した士郎は砲弾飛び交うなかで和子に手紙を書いている。士郎がこの後〈戦死〉したかどうかは定かでないのだが、生存の可能性は低いといえるだろう。<sup>(70)</sup>

…今や、我々はこの戦争の中に、新しい清い人間生活の理想の未来を認めることに、希望を置いてゐる。／人間のあらゆる本能的の卑しい利己心から完全に解放されて国家民族への忠実と名誉を負ひ美しく偉大な崇高な日本への信仰と愛の為にこそ、僕らは戦ひ、かつは、死をも辞さないのだ。(一九三九・七・一七)

「本能的の卑しい利己心」を克服して、「新しい清い人間生活の理

想の未来、「美しく偉大な崇高な日本」を実現するためには、死を辞さないという姿勢は、「本能」による恋愛に囚われていた彼女を反省させ、〈公〉への新しい意識をもたらす。

この論理は、満州の地で鮎川と不倫関係に陥っていた与志にも同じものが指摘できる。与志と鮎川との関係は、職業的な尊敬に始まって、次第に「この人の前で、ふたりだけのときは、もう女医でなく、ただの(女)になる<sup>(74)</sup>」というものになっていた。しかし、それを知った妻・桂玉の自殺未遂が、彼女と鮎川を反省させる。与志は「幸い、仕事を持つ女は、なにもかも、すべてを、それに打ち込んで、心の傷手さへ忘れられる」、「個人的のすべては、公の職場にあつて、打ち棄てられねばならない。そして今、それは彼女にとつて救ひでもあるのだ<sup>(75)</sup>」と、失恋の悲しみを仕事に振り替えていくのである。

しかし、ここで重要なのは、女が男に惹かれることが〈女〉としての「自然」、「本能」的なものであり、またそれゆえに「低い」ものとして位置づけられていることである。このとき、この論理は、〈異性愛〉秩序の否定の意味を持つ。だからこそ、〈女〉の「本能」を乗り越えた藤穂は、有為子の元に戻って、再び友情を回復することができ。「兄の戦死は——有為子との友情を、必ず戻して貰へるほど、自分の心を清め——人をそこなふ《恋愛》を、いさぎよく精算させた<sup>(76)</sup>」のであり、〈異性愛〉の前で一度分断された〈同性愛〉が、ここで取り戻されたのだといつていいだろう。

ただし、この〈同性愛〉は迂回路を通らなければ成立することができない。この時、有為子は実験中の細菌感染のために死の淵にあった。藤穂との絆の回復を確認することは叶ったが、結局有為子は死んでいく。この後、藤穂は突如、麟也との結婚を宣言する。この展開は、藤穂が再び〈異性愛〉の規範のもとに戻ったことを示すようでもあるが、盲目であることで応召もされない麟也は、当時の基準から言えば、男性としては欠損のある人物である。藤穂の母はそんな麟也の元に嫁がせることをためらうが、浦五郎は麟也を「栄吉がいくさで眼をつぶして、帰って来てくれたと思つて、英の身代りの新しい伴<sup>(77)</sup>」と思うことで受け入れる。麟也は死者によつて補完されてようやく男性として認められる存在なのである。むしろ麟也は、死んだ有為子の代理としての意味を強く担っている。昔聡子は、有為子の死を「同性愛の欲望」の「抹殺<sup>(78)</sup>」であると捉えたが、麟也の変則性、またこの他の〈異性愛〉関係がごとごとく分断されていることも考え合わせるならば、藤穂と麟也の結婚は、一見〈異性愛〉の関係であるかのように見せながら、〈同性愛〉の欲望を生き延びさせる方法であつたのではないか。ここには藤穂と有為子の〈同性愛〉の実現が託されているのである。

また、これまで家族の関係からは逸脱的な位置にありつづけていた藤穂は、結婚を機に浦五郎の籍に入り、正式に「お義父さんの娘、お兄さんの妹として改め<sup>(79)</sup>」てもらふことになる。関係を再編成して、安定的な家族を形成するように見えるこの措置は、一面では彼女を



〈国民〉として正しく位置づけるものであるだろう。だが、角度を変えてみれば、不完全な男性たる麟也と、公共性の高い仕事に従事する女性である藤穂の夫婦は、従来の家父長的な家族関係を逆転するものともなっているのである。

女性たちが私的存在から公的存在へと目覚めていくという展開は、典型的な総力戦体制下の女性動員の物語にはかならない。しかし、この小説において特異なのは、〈異性愛〉を否定しつつそれを行っていることである。銃後の女性の動員にはさまざまな形態があり得るが、労働などによる国家への奉仕のほかに、女性には〈母〉として家族の再生産を担うことが強く求められている。そのとき〈異性愛〉秩序とは、その家族を維持するために欠くことのできないものである。だが、本作が示す〈異性愛〉や家族関係には、必ず分断や変則的なずれが生じている。〈母〉の役割は重視されるもの、それはつねに職業と代替・置換可能なものとして捉えられる。むしろここで職業に邁進することは、〈母〉役割を回避するためのものとして機能しているとも言えるだろう。このように〈妻〉・〈母〉役割を免除された女性の職業的な国家への貢献の側面を強く打ちだすことは、銃後の女性に求められる規範や秩序を裏切るような不穏さを秘めたものになっているのではないだろうか。

## (7) 男のいない世界を望む

「女の教室」という小説が示すのは、総力戦下における女性の公的役割の重要性である。そして小説内の認識の枠組みは当時の「東亜新秩序」声明が示したような〈聖戦〉イデオロギーに則ったものであることも間違いない。古い中国、古い満州、そして古い日本を打破して、新しいアジアの秩序を実現しようという志向は、一面では日本の自己批判を含んでいるものであるが、「東亜共同体」論が結果的に植民地主義的なジレンマを克服できなかったように、この小説もまた日本の中国、満州への侵略や支配を相対化するような強度はなかったと言わざるをえない。むしろその〈聖戦〉イデオロギーを甘美な物語にして、銃後の読者に届けたことの意味はやはり問われなければならないだろう。

しかし、この小説はそうしたイデオロギーを忠実に実行しながら、同時にもっと過激な欲望を、「変革」のヴィジョンを夢見てしまっていたのではないだろうか。

新しい、より良い世界を作り出そうとするとき、その担い手として期待されたのが女性たちである。特にこの小説では、女性への偏見を払拭し、また女性が誇りを持って働くことが何よりも奨励されていることは間違いない。ただし、女性たちが自覚を持って尊い仕事に邁進していくことの裏に張り付いている隠された欲望とは、男

たちが消えていくことである。本作の〈女医〉の仕事は、銃後の代替労働力というレベルをはるかに越えてその役割を肥大させ、それまで男性が担ってきた領域を奪取し、彼らを無力化し、さらには排除すら行おうとするものである。

改めてこの物語を整理してみれば、藤穂の覚醒の契機として、栄吉の〈戦死〉があったように、万千子の救癩事業の発端も、恵之助の〈死〉であった。鳳英も夫の〈戦死〉を乗り越えて苦難の道を歩んでいる。そして士郎の〈戦死〉は、和子にも新たな自覚を与えるだろう。また藤穂の前から龍一が去っていったように、与志から鮎川が去って、彼女は決意を新たにしている。女たちの進化には、男の〈死〉が必要とされる。藤穂と麟也以外の、男と女の恋愛関係はいずれも分断される。そして男の消えて行く世界で、女たちは男の担っていた仕事に進出できるようになり、それによって自立することもできる。女の「本能」を感わされることもなくなつて、〈女同士の絆〉も維持される。続く太平洋戦争下において散華や英霊のイデオロギーによって男たちを強く結び付けることになる〈戦死〉が、ここでは逆に〈女同士の絆〉の形成に利用されるかたちになっているといえよう。そしてそこに残ることが許されているのは、死んだ男の遺した子どもたちと、男性性を挫かれた男くらいなのである。

この小説にとつて、乗り越えるべき古い世界とは、〈男の世界〉に他ならない。そして〈戦争〉は本当に男たちを消すことを実現してしまつたのである。新しい〈女の世界〉を実現するチャンスとし

て、この〈戦争〉は歓迎されている。

これはあまりにも不穏な「変革」の「希望」である。しかし、これまで吉屋が描いてきたものを思い起こしてみれば、それを短絡的な男性嫌悪として断じてしまうこともできないだろう。これまで吉屋は、その小説やエッセイにおいて、性別役割、性的指向や性自認などをめぐる違和を持ちながらも、規範的価値観との間でそれを抑圧し、葛藤するさまをくりかえしあらわしていた<sup>80</sup>。そこに〈戦争〉によって、〈男のいない世界〉という仮説がもたらされたとき、〈戦争〉がこれまでの葛藤を一挙に解決するような「希望」のように見えてしまつたということではなかつたのか。

その時代のさなかにあつて、〈戦争〉を肯定したことを、単なる無知や認識不足だけに還元することはできない。もちろんその根本にある問題は拭いがたいとしても、「東亜共同体」の議論のなかに、それまでの日本のあり方を乗り越えようとする理想が込められていたように、吉屋信子が描いたこの小説にも、「変革」への「希望」が託されていたことを見落としてはいけないだろう。マイノリティとしての抑圧が〈戦争〉の肯定に結び付いてしまうことは悲劇というほかない。だが、むしろ問題とすべきは、そのようなかたちでこの苦しみを解除し得なかつたこと、強力な時代の動向のなかにあつて、個人の苦悩や欲望がたやすくそこに掬い取られてしまうこととの危うさの方ではないだろうか。

注

(1) 雑誌初出と単行本には、いくつか字句の改稿がある他、雑誌掲載時の写真・挿絵等は巻頭の一部を除いて収録されていない。また、雑誌初出では次回予告となっていた「戦火の上海決死行」末尾部分が変更され、「さらば、戦徒よ」と「戦場より書斎に戻りて」の二信が加筆されている。改稿のなかでやや大きなものとしては、「戦火の上海決死行」中の以下二点がある。

① 「戦徒の宿」

初出…卓上に早速上海地図を掲げると、なるほど、今上陸した日本郵船の波止場に近い、共同租界黄浦路には、日本、米国、独逸、露国、四ヶ国の領事館が、ずらり並んで、その向うにアスター・ハウスが立ち、私の部屋の露台が、丁度露国領事館と向ひ合せだった。

単行本…〔上記の後に追加〕あ、かくも上海戦は、国際的檣舞台の戦場にて正々堂々たる戦ひを日本軍が続けてゐるのだつた。

② 初出…「海の守護神、○○」↓単行本…「海の守護神、出雲」

初出…「さあ、どうも、それは——まあ、要するに戦は大いに我々がやります。我々は戦争には、大いに戦つて、勝つのが軍人の職務だから、あくまでやります。その点は決して、心配なさらん  
でよろしい。まあ、こんな事より別に——」

単行本…我々は、大いに戦つて必ず勝つのが軍人の職務だから、あくまでやります。その点は、決して、心配なさらんでもよろしい。いくさといふものをして勝つには、計算が大事だが、例えば、どれだけ戦かへば、いくら弾丸があるとか——さういふ成算は万事わが軍には、出来てゐる、大丈夫です」

(2) そのうち、『主婦之友』発表のものは以下の通り。

「軍医と従軍看護婦決死の働きを聴く」(一九三七年二月)

「海の荒鷲と生活するの記」(一九三八年九月)

「問題の満ソ国境 戦火の張鼓峰一番乗り」(一九三八年一〇月)

「漢口攻略戦従軍記 海軍従軍日記」(一九三八年十一月号)

「海軍殊勲部隊長の感激座談会」(一九三九年一月)

「若き海の勇者と生活する記—枝島海軍兵学校を訪ねて」(一九三九年五月)

「汪兆銘に会つて来ました」(一九三九年一月)

「満州大陸の土に生くる人々」(一九四〇年十一月号)

「波騒ぐ太平洋を語る—海軍将校の座談会」(一九四〇年二月)

「蘭印」(一九四一年四月)

「蘭印の日本婦人の純情哀話驟雨」(一九四一年五月)

「仏印に來たりて」(一九四二年一月)

「仏印・泰国従軍記」(一九四二年二月)

「南方基地仏印現地報告」(一九四二年六月) など。

なお、それらをまとめた『最近私に見て來た蘭印』(一九四一年、主婦の友社) が刊行されている。

他誌発表のものとしては、「従軍作家観戦記」(『日の出』一九三八年一二月)、「長江を遡る」(『近代女性』一九三八年一二月)、「甦正する東印度」(『大洋』一九四二年六月) などがある。

(3) 関連の論文は以下の通り。亀山利子「吉屋信子と林芙美子の従軍記

を読む—ペン部隊の紅二点」(『銃後史ノート』復刊二号、一九八一年)、高崎隆二『戦場の女流作家たち』(一九九五年、論創社)、渡邊澄子「戦争と女性—太平洋戦争前半期の吉屋信子を視座として」(『文学史を読みかえる4 戦時下の文学』二〇〇〇年、インパクト出版会)、渡邊澄子「戦争と女性—吉屋信子を視座として」(『大東文化大学紀要』

- 第三八号、二〇〇〇年)、神谷忠孝「従軍女性作家—吉屋信子を中心に」(『社会文学』第一五号、二〇〇一年)、北田幸恵「解説」(『戦時下の女性文学—吉屋信子 戦禍の北支上海を行く』二〇〇二年、ゆまに書房)、北田幸恵「女性解放の夢と陥穽—吉屋信子の報告文学」(岡野幸江他編『女たちの戦争責任』所収、二〇〇四年、東京堂出版)、金井景子「報告が報国になるとき—林芙美子『戦線』、『北岸部隊』が教えてくれること」(『国文学解釈と鑑賞』二〇〇四年)、飯田祐子「従軍記を読む—林芙美子『戦線』、『北岸部隊』」(島村輝他編『文学年報 2 ポストコロニアルの地平』所収、二〇〇四年、世織書房)、久米依子「少女小説から従軍記へ—総力戦下の吉屋信子の報告文」(飯田祐子他編『少女少年のポリティクス』二〇〇九年二月二二日、青弓社、のちに『少女小説』の生成—ジェンダー・ポリティクスの世紀』二〇一三年六月一二日、青弓社に所収)。菅聡子「女の友情」のゆくえ—吉屋信子『女の教室』における皇民化教育」(『人文科学研究』二〇一〇年三月、のちに『女が国家を裏切るとき—女学生、一葉、吉屋信子』二〇一一年一月二七日、岩波書店に所収)など。
- (4) 前掲、亀山利子論。また、この詠嘆調の「甘い文体」については、既に同時代に板垣直子「戦争文学批判」、『新潮』一九三九年三月)が「婦人雑誌の読者を相手に家庭の悲劇を展開してゆくふてぶてしさ、それにも一貫して出ている」と批判しており、これによって「体験の表現が浅く、ただで終る危険」があることを指摘している。
- (5) 前掲、高崎隆二論。
- (6) 前掲、久米依子論。
- (7) 前掲、菅聡子論。
- (8) 前掲、飯田祐子論。
- (9) 前掲、渡邊澄子論(『戦争と女性』)。
- (10) 「次の朝刊小説」『東京日日新聞』一九三八(昭和一三)年二月一七日
- (11) 「作者の言葉」『東京日日新聞』一九三八(昭和一三)年二月一七日
- (12) この女性は「王英さん」として、「漢口攻略戦従軍記海軍従軍日記」(『主婦之友』一九三八年一月)にも登場している。
- (13) 藤田篤子「占領期における再刊小説の本文改変—吉屋信子の作品を例に」(『Intelligence』第一四号、二〇一四年三月)
- (14) 一九三九・四・一七
- (15) 一九三九・四・二五
- (16) 一九三九・四・二五
- (17) クリストイー著、矢内原忠雄訳『奉天三十年』(一九三八(昭和一三)年九月、岩波書店)
- (18) 一九三九・五・二三
- (19) 一九三九・五・二二
- (20) 一九三九・一・一五
- (21) 一九三九・一・一六
- (22) 一九三九・三・一三
- (23) 一九三九・六・一
- (24) 一九三九・八・二
- (25) 米谷匡史「戦時期日本の社会思想—現代化と戦時変革」(『思想』八八二号、一九九七年二月)、同『アジア/日本』(二〇〇六年一月、岩波書店)などを参照。
- (26) 同前。
- (27) 大澤聡「複製装置としての「東亜共同体」論—三木清と船山信一」(石井知章・小林英夫・米谷匡史編『一九三〇年代のアジア社会論—

- 「東亜共同体」論を中心とする言説空間の諸相」、二〇一〇年二月、社会評論社」などを参照。
- (28) 一九三九・六・六
- (29) 一九三九・六・八
- (30) 一九三九・七・一四
- (31) 山本起世子「女医と戦争―一九四〇―一九四四年―」(『園田学園女子大学論文集』三二号、一九九七年二月)
- (32) 同前。
- (33) 一九三九・一・一八
- (34) 一九三九・四・一
- (35) 一九三九・六・一八
- (36) 前掲、菅聡子論。
- (37) 本作と小川正子「小島の春」との関係および、当時の救癩事業の問題については、前掲の菅聡子論に指摘がある。また、荒井裕樹「御歌と〈救癩〉―貞明皇后神格化と御歌の社会的機能を巡って―」(『文学』七卷六号、二〇〇六年十一月、岩波書店、および同「病友」なる支配―小川正子「小島の春」試論」(『昭和文学研究』五五集、二〇〇七年九月)を参照した。(のちに『隔離の文学―ハンセン病療養所の自己表象史』二〇一一年十一月、書肆アルスに所収。)
- (38) 一九三九・四・二
- (39) 一九三九・五・一三
- (40) 一九三九・六・一八
- (41) 一九三九・六・七
- (42) 一九三九・七・二二
- (43) 一九三九・四・二〇
- (44) 一九三九・四・二〇
- (45) 一九三九・七・二三
- (46) 山本起世子「近代「女医」をめぐる言説戦略」(『園田学園女子大学論文集』三〇号、一九九五年十二月)
- (47) 「解剖台」(『医事公論』一三八〇号、一九三九〔昭和一四〕年五月)
- (48) 山本杉「婦人の動向」(『日本女医会雑誌』九〇号、一九三九〔昭和一四〕年五月)
- (49) 前掲、山本起世子「近代「女医」をめぐる言説戦略」。
- (50) 一九三九・一・一一
- (51) 一九三九・一・一二
- (52) 一九三九・三・一三
- (53) 一九三九・四・九
- (54) 「未亡人」(『主婦之友』一九三九〔昭和一四〕年七月―翌年十二月)
- (55) 一九三九・四・三
- (56) 一九三九・六・一六
- (57) 一九三九・五・九
- (58) 一九三九・一・二七
- (59) 一九三九・一・二七
- (60) 一九三九・四・六
- (61) 一九三九・四・七
- (62) 一九三九・一・三一
- (63) 一九三九・四・五
- (64) 一九三九・四・六
- (65) 一九三九・六・二三
- (66) 一九三九・六・二五
- (67) 一九三九・六・二八
- (68) 一九三九・一・二七

- (69) 一九三九・七・三  
 (70) 一九三九・七・三  
 (71) 一九三九・六・二八  
 (72) 一九三九・七・一三  
 (73) 和子の夫・士郎については、はっきりと「戦死」が描かれているわけではないが、前掲の菅聡子論では「物語時間内に示された数々の伏線が形作る文脈が示唆するのは、物語時間の外部、すなわち未来の時間において、和子が戦争未亡人となるだろうことである」と指摘している。

- (74) 一九三九・五・二四  
 (75) 一九三九・八・一  
 (76) 一九三九・七・八  
 (77) 一九三九・七・二八  
 (78) 前掲、菅聡子論。  
 (79) 一九三九・七・二八  
 (80) 拙論「困難な〈友情〉——吉屋信子「女の友情」論」『昭和文学研究』六五号、二〇一二年九月）などを参照されたい。

「女の教室」本文引用は、初出『東京日日・大阪毎日新聞』（一九三九〔昭和一四〕年から一月一日から八月二日）に拠る。旧漢字は適宜新字に変更し、ルビも適宜省略した。引用末尾には掲載年月日を付した。なお、本稿は、平成二十六年度学習院大学人文科学研究所若手研究者助成（研究課題「吉屋信子の大衆長篇小説についての研究」）の給付を受けた研究成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY  
 Nobuko Yoshiya's "WAR"-A study of  
 "Onna no Kyoshitsu (The Classroom of Women)"  
 TAKEDA Shiho

This paper discusses Nobuko Yoshiya's "Onna no Kyoshitsu (The Classroom of Women)", which was penned in 1939 and published in the Tokyo Nichi Nichi Shinbun-Osaka Mainichi Shinbun. In this work, she depicted the lives of seven female doctors during the Japan-China War. In the war experienced in this work, a place that had previously only been occupied by men, women take his place for being incharge. Furthermore, through the death of men that seduce women, the feminine instinct is not disturbed; the women achieve a higher order of spirit, and the bonds between the women that had been broken are recovered. This matches the ideology of the mobilization of women and the crusade for a 'New Order in East Asia'. But her desire for a new society of women is beyond the scope of National policy and reaches a dangerous conclusion by dreaming of a world without men. This paper discusses the problem of what would find hope in 'war' to be free from repression.

*Key Words:* Nobuko Yoshiya, Women doctors, Japan-China war, 'New Order in East Asia', Mobilization of women